



Title	大学における日本語教育の理念と実践：大阪大学バンコク教育研究センター開所記念セミナー報告
Author(s)	三牧，陽子；村岡，貴子
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 2007, 11, p. 49-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50664
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学における日本語教育の理念と実践

—大阪大学バンコク教育研究センター開所記念セミナー報告—

三牧 陽子*・村岡 貴子*

要 旨

筆者らは、2006年10月17日にタイのバンコクで開催された大阪大学バンコク教育研究センター開所記念セミナーにおいて、「大学における日本語教育の理念と実践」と題して3時間のセミナーを実施した。チューラーロンコーン大学およびタマサート大学に所属する日本語教育の教員も含め、それぞれ報告を行い、その後全体討論を行った。本稿ではそのセミナーの報告を行う。

【キーワード】日本語学習ニーズ、JSP、専門日本語、専門日本語教育

1 はじめに

1-1 大阪大学バンコク教育研究センター開所式

大阪大学バンコク教育研究センターは、サンフランシスコ、グローニンゲンに次ぐ大阪大学の3番目の海外拠点として設置された。従来から大阪大学では、生物工学国際交流センターがマヒドン大学に東南アジア共同研究拠点を置き、また、微生物病研究所はタイ国保健省医科学局の協力のもと国立予防衛生研究所内にタイ感染症共同研究センターを設置し、それぞれバンコクにおいて緊密な共同研究の実績を挙げている。大阪大学としてはアジア初となる海外拠点の発足を記念して、2006年10月16日には事務所開き、開所式典、レセプションといった一連の行事が宮原総長をはじめ大阪大学関係者、交流協定締結大学の学長、卒業生等多くの出席のもとに執り行われた。翌17日に開所式記念セミナーが計6件行われ、大阪大学およびタイの関係者等による発表が行われた。筆者らはそのうちの1つのセミナーを担当・実施したので、ここに報告する¹。

1-2 セミナーの目的

セミナーのテーマは、「大学における日本語教育の理念と実践」とした。タイでは日本語教育が盛んで大阪大学の留学生数もタイは中国、韓国に次いで第3位を占めている。バンコク教育研究センターの開所を契機に新たに大学間交流協定も増え、さらなる学生交流の推進が期待されている現状に鑑み、大学レベルにおける日本語教育はどうあるべきかという理念およびその実践に関して、タイと日本の日本語教育関係者が情報交換するとともに、現状を多様な観点から分析することによって、両国の大学における日本語教育のあり方を考える上での視座を提供することを目的とした。

各大学における日本語教育は、当然他の日本語教育機関とは異なる点を共通して持っているものの、大学の置かれた立場、学習者の日本語を学習する目的、専門や学習歴、日本語教育に費やす時間数など、大学によって条件は千差万別であり、担当教員はそれら様々な条件を勘案してコースデザインを行っている。その際に重要なのは、各大学における対象学習者に必要なニーズに応じてデザインされるJSP (Japanese for Specific Purposes) である。日本語教育の場が、日本語が話される日本国内であろうと、タイで外国語と

* 大阪大学留学生センター教授

して日本語を学ぶ場合であろうと、JSPという視点は共通して重要である。そこで、本セミナーでは、他の日本語教育機関とは異なる「大学における」日本語教育の“Specific Purposes”について、特に、大阪大学留学生センターが標榜する「専門日本語」(Japanese for Academic Purposes)の視座を提供しつつ議論を深めることとした。

1-3 セミナーのプログラム

プログラムは次の通り、大阪大学、チュラーロンコーン大学、タマサート大学の各大学における日本語学習者の実態、日本語教育の理念および教育実践の現状が報告され、次いで、大学における日本語教育のあり方についての討論のために「専門日本語教育」という視座を提示し、後半部では参加者も加わって討論を行った。以下がプログラムである。

大学における日本語教育の理念と実践

13:30 開会の辞

13:40 チュラーロンコーン大学における日本語教育の理念と実践：チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学学科助教授

ウォラウト・チラソンバット

14:10 タマサート大学における日本語教育の理念と実践：タマサート大学教養部日本語学科准教授
ワリントン・ウオーウオン

14:40 大阪大学における日本語教育の理念と実践：大阪大学留学生センター教授 三牧 陽子

15:10 休憩

15:40 「専門日本語教育」という視座：大阪大学留学生センター教授 村岡 貴子

16:10 討論 「大学における日本語教育：現状分析と将来への提言」

17:00 閉会の辞

1-4 チュラーロンコーン大学およびタマサート大学からの報告の概要

チュラーロンコーン大学からは、日本語を副専攻あるいは選択コースとして履修する学生とは別コースとなっている日本語主専攻の学生に対する日本語教育を中心に報告された。日本語はタイ語母語話者にとって習得が困難な言語であることから、日本語を主専攻とする学生には副専攻は認められず、他言語専攻の学生より多くの単位取得が求められ、また日本文学も必修としていること、卒業後の進路としては、大学院への進学と並んで日本企業への就職が多いため、選択科目の中には「メディアの日本語」「タイ-日翻訳」「観光日本語」「ビジネス日本語」などが含まれているとのことであった。

一方、タマサート大学では、教養学部の14専攻のうち、日本語専攻は心理、英語に次いで50名と定員が多く、現在までの日本語主専攻の卒業生は600名に上るという。コースの目標を(1)日本語の4技能の習得。最低でも日本語能力試験の2級合格を目指す、(2)日本の社会、経済、政治、文化、文学の理解、(3)卒業後の就職先や研究(言語研究・日本研究)において日本語を生かせること、の3点に置き、その実現のためのカリキュラム、および、タイ人教員と日本人教員との授業分担体制、日本の大学で取得した単位の換算等が紹介された。

タイでは高校ですでに日本語を学習してから入学する学生が増加していることが近年の傾向であるが、高校によってレベル差があること、チュラーロンコーン大学では日本語主専攻の学生は既習者のみとなったこと、タマサート大学では既習者と未習者を半数ずつ入学させていることがそれぞれ報告された。

本稿では、筆者らの報告の概要を各々2節、3節で述べ、最後にセミナー全体の意義をまとめる。

2 大阪大学における日本語教育の理念と実践

2-1 理念と実践

まず、大阪大学における日本語教育に関する理念は、多様な背景を持つ留学生を隣人として受け入れること、また、彼らの日本語学習を支援するために、(1) 多様なニーズを的確に把握すること、(2) 大阪大学の留学生のニーズに合致した日本語教育 (JSP) を実施することである。そういった理念に基づき、現在「留学生日本語プログラム」を実施している。

2-2 考慮すべき多様な背景

その際に、主に次の4点が考慮すべき条件であると考ええる。

① 目標言語が使用される第2言語環境にあること

これは、滞日期間の長短はあるものの、留学生に共通する条件であり、その日本語環境を日本語授業に積極的に取り入れることが可能である。以下、2006年5月1日現在の大阪大学の留学生のデータを挙げる。

② 在籍段階・留学生カテゴリー

大学院生 (63% : 博士前期課程27%、博士後期課程36%) が主体であるが、学部生 (20%)、その他 (研究生・特別聴講学生(短期留学生)・集中日本語予備教育生・日研生等 : 17%) と多様なカテゴリーの留学生が在籍している。

③ 留学生の背景

留学生が在籍する専門分野は10学部・15研究科と幅広い。内訳は、図1の通り、理工系が半数と多く、残りを社会科学系、人文科学系、医歯薬系がほぼ均等に占める。

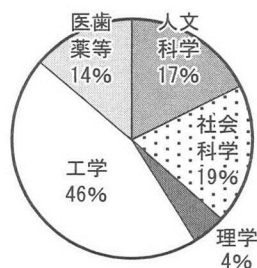


図1 大阪大学の留学生の専門分野の分布(2006年5月)

また、出身国・地域は74に及ぶ。その内訳は、アジアが81%と圧倒的に多いが、その他ヨーロッパ10%、中南米3%、北米・中近東・アフリカ各2%、オセアニア1%と多様である。74カ国・地域のうち上位10位は、図2の通りである。

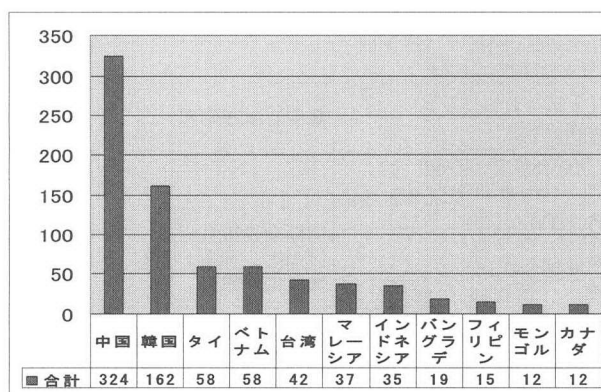


図2 大阪大学の留学生の出身国・地域上位10位
(2006年5月)

④ 日本語学習の位置づけと日本語レベル

日本語習得を主な留学目的とする留学生 (日本語・日本文化研修留学生) から、研究活動は主に英語で行い、日常生活に支障のない程度の日本語を学習しようという一部の理系の博士後期課程の留学生まで多様である。その日本語レベルは、全くの未習者から超上級まで、あらゆるレベルにわたっている。

2-3 日本語学習ニーズ

2-3-1 留学生カテゴリーと日本語学習ニーズ

このような多様な留学生の日本語学習ニーズには、大別すると、学習研究活動を日本語で行うための「アカデミックなニーズ」と、日本社会 (学内・学外) で生活するための「第2言語としての一般的なニーズ」の2通りがある。次の表1は、留学生カテゴリー別に、ニーズの重要度を模式的に示したものである。

表1 留学生カテゴリー別の日本語学習ニーズ

留学生カテゴリー	在籍段階	優先	日本語学習ニーズ		日本語コマ数/週
			主	従	
学部生	学部	単位取得。 日本語は外国語科目として履修	アカデミック	一般	1～3コマ
大学院生	大学院	研究	アカデミック	一般	少
研究生	大学院	大学院入学準備 (専門・日本語)	アカデミック	一般	少～中
日本語研修生 (日本語研修コース)	大学院 入学前		アカデミック	一般	最大 18コマ
日本語・日本文化 研修留学生		集中日本語学習	アカデミック	一般	最大 18コマ
短期留学 (OUSSEP-AJLS) : 日本語中心	学部中心		アカデミック	一般	最大 18コマ
短期留学 プログラム (OUSSEP) : 英語中心		国際交流科目 (英語)、研究、 異文化体験	アカデミック	一般	3コマ (+α)
生 部局受入	大学院/ 学部	多様	アカデミック	一般	少～中
日韓共同理工系 学部留学生	学部 入学前	日本語学習 理数科目・英語	アカデミック	異文化 適応	8コマ

2-3-2 学内調査の結果から

さらに留学生の日本語学習ニーズを把握するために実施した学内調査（インタビューおよびアンケート）の結果（報告書2003）の一部を次に紹介する。

まず、日本語学習の希望が強いこと（学部留学生の76.7%、大学院留学生の70.4%が希望）、さらに現在の日本語レベルが低いほど、学習希望が強い（未習～中級の80～90%近くが希望）ことが示された。また、日本語学習を希望する理由としては、アカデミックな理由を挙げた者が43%と最も多数を占めた²。以下、明らかとなったアカデミックなニーズおよび第2言語としてのニーズの特徴について述べる。以下は、大阪大学で日本語の学習を希望する科目についての調査結果である。

まず、「アカデミックな日本語学習ニーズ」に関して、

① 口頭発表

大学院生、特に博士前期課程の留学生のニーズが強い（83.3%）。専門分野には差がなく、全分野に必要とされている（70.4～70.6%）ことがわかる。

② レポート・論文作成

日本語でレポートや論文を執筆することが求められる

る学部生（90.9%）および博士前期課程の院生（75.0%）にとって、特にニーズが高い。口頭発表と異なり、分野別に差が見られる（人文社会科学系81.5%＞理工系54.5%＞生命科学系41.2%）ことも特徴的である。

③ 文献読解

全体に上述の口頭発表やレポート等執筆に比してニーズは下がるが、在籍段階（学部生65.0%＞博士前期課程58.3%＞博士後期課程37.5%）、および、専門分野別（人文社会科学系59.3%＞生命科学系52.9%＞理工系38.6%）に、ニーズに差が見られた。

一方、日本において生活している留学生にとって、第2言語としての一般的な日本語は、次の通りかなり高い頻度で使用されている実態が明らかになった。

- ・ 大学外の日常生活：「日本語のみ」77%
- ・ 研究室でのコミュニケーション：「日本語のみ」70%
- ・ 研究指導：「日本語が中心」60%以上

「第2外国語としての日本語学習ニーズ」に関しては、受講希望科目として「コミュニケーション（会話・文法）」が突出して高いニーズ（全体86.9%）を示し、その中でも90%以上の高いニーズを示したのは、生命科学系・理工系、非漢字系、日本語レベルが低い留学生であった。「漢字」学習の希望に関しては、母語背景による大差（非漢字系80.0%＞漢字系20.9%）が見られた。

2-4 実践としての「留学生日本語プログラム」

以上のような本学の留学生の日本語使用実態や日本語学習ニーズを、大阪大学留学生センターで実施している「留学生日本語プログラム」のコースデザインにどのように反映したか、その概要を紹介する。

2-4-1 科目編成

各科目の目的を明確に示し、学習者自らが主体的に科目を選択できるように配慮した。アカデミックな学習ニーズに応える科目群には「専門日本語」カテゴリーがある。「専門読解」「専門作文」「専門会話」「専門プ

プレゼンテーション」「専門文法・読解」の各科目が配置され、それぞれ留学生が日本語を使用して専門活動ができることを目的にした科目となっている。一方、第2言語としての日本語学習ニーズに応える科目群は「一般日本語」カテゴリーで、「総合日本語」と「漢字と語彙」科目が用意されている。科目によっては、分野別特徴を反映した「プレゼンテーション(理系) / (文系)」、あるいは母語による背景別の「漢字と語彙(漢字系) / (非漢字系)」のように、留学生の多様性を考慮に入れた科目も設定されている。

2-4-2 コース・科目の選択

コースとしては、週に最大18コマまで履修可能な「集中コース」(日本語研修コース)、および、学習者自らが日本語学習ニーズや日本語学習に割ける時間等を考慮して科目を選択できるアラカルト方式である「選択コース」がある。「選択コース」では、入門から超上級まで6レベルの中から学期毎にプレースメントテストの結果によってレベルが決定され、そのレベルの科目の中から主体的に科目を選択していく。以前の留学生カテゴリー別プログラム(いわば「定食方式」)から2004年にカリキュラムを一新したことによって、留学生にとっての選択の幅が大きく広がり、「柔軟に、かつ、効率的に」留学生の日本語学習ニーズに対応できるプログラムとなったといえよう。

3 「専門日本語教育」という視座

以上の報告をふまえ、本セミナーの全体討論における論点を提供するため、大学での日本語教育のあり方を検討する上で必要な「専門日本語教育」という視座について発表した。

3-1 「専門日本語」と「専門日本語教育」

まず、本セミナーでの「専門日本語」について説明し、次に、「専門日本語教育」の特徴に言及する。

3-1-1 「専門日本語」 - アカデミックな目的のための日本語 -

大学で求められるアカデミックな目的のための専門日本語(Japanese for Academic Purposes)は、現状では、次のように複数の解釈を含むものである。

- (1) 特定の専門分野に特化して用いられる日本語
- (2) 多くの専門分野に共通して用いられる日本語
- (3) アカデミックジャパニーズ

(1)は、例えば、工学系日本語、経済学系日本語といった分野によって異なると考えられる日本語である。また、それらはさらに細分化された分野ごとに用いられる日本語を想定することができる。これらは、専門用語のみを示すのではなく、論文や口頭発表といった文章・談話のレベルの日本語表現も含むものである³⁾。

それに対して、(2)は分野を特化せず、多くの学問研究の場で共通して求められる日本語を想定している。特に多様な専門分野の日本語学習者が参加する日本語の授業では、(2)の考え方は基本的なものとして重視される。

(3)は、一般に、大学での生活と勉学に必要なものとされており、2002年から独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)によって実施されている「日本留学試験」に出題される日本語でもある。なお、この試験は、特に大学(学部)等に入学する際に利用される試験である。

本稿の「専門日本語」は、上記3点を含む広い観点から、それぞれの大学の実情に応じて、大学生あるいは大学院生の日本語学習者に必要とされるアカデミックな目的のための日本語と定義しておく。

3-1-2 「専門日本語教育」の特徴

大学における専門日本語教育の特徴として、村岡(2003 pp.100-101)を引用し、以下の3点を挙げる。

- ・比較的小期間での効果的かつ効率的な教育が求められる
- ・学習者は比較的高度な専門性を有する
- ・レベル設定および教材(リソース)は一般日本語の場合と異なる

基本的に、大学に在籍する多くの留学生は各自の専

門分野における学習・研究活動が円滑に行えるよう日本語を学ぶ必要があり、日本語学習に費やせる時間は限られている。そこでの専門日本語教育は、学習者である留学生が専門性を有する成人であることに留意した、効果的かつ効率的な第2言語教育であることが望まれる。また、先述したように、留学生の日本語学習のニーズは多様であるため、そのニーズに合致した教育を実施することが重要である。したがって、例えば、大学での研究生活以外に、あらゆる教養を深めるために高度な日本語能力を総合的に養成する必要はないため、必ずしも全員が上級や超上級まで達すること、あるいは4技能をすべて同様に習得することは必要とされない。

3-2 「専門日本語コミュニケーション」と具体例

本発表では、村岡（2003）をもとに、専門日本語を用いたコミュニケーションの様態を広く「専門日本語コミュニケーション」として位置づける。このことによって、単に語彙・表現のみを問題とするのではなく、さまざまな文型、談話・文章が用いられる背景や学習環境にも注目したいと考える。さらに、大阪大学で日本語を学ぶ大学院レベルの留学生のケース⁴を例として、日本語学習者の置かれた学習・研究活動の環境、および専門日本語コミュニケーションの状況と問題点等について簡単に報告する。

3-2-1 専門日本語コミュニケーションの場面

まず、当該理系大学院留学生が大学で日々接する場面を以下の通り、「授業」「研究室内活動」「研究相談」の3つに分類し、必要とされる日本語の技能等について報告する。なお、この調査では博士前期課程に在籍する留学生を対象としたため、単位取得のためにも重要な「授業」という場面を取り上げた。

① 授業

次の通り、「授業」ではさまざまな活動が求められる。

- ・講義聴解とノートテイキング、テキストおよび文献の読解

- ・口頭発表および質疑応答
- ・ディスカッション
- ・試験およびレポート

これらは、講義を聴きながらノートをとるといった複合的な技能が要請されるものである。

② 研究室内活動

「研究室内活動」は、主要な活動として次の4つの活動に分類される。

- ・実験（共同or個別）
- ・研究会活動（発表と質疑応答）
- ・打ち合わせ
- ・イベント等の企画・運営

いわゆる理系の研究室には、教授や助教授、助手といった教員と、学部生から博士後期課程の大学院生や研究員が所属している。留学生は、この大所帯の中で日々円滑にコミュニケーションを図りながら、実験や研究会だけでなく、共同で種々の活動を行うことが求められる。なお、上記のイベントには、研究室所属のメンバーが行動を共にする研究会の終了後や論文提出後等の打ち上げ会、あるいは夏休みに予定される旅行等が含まれる。

③ 研究相談

「研究相談」には、次のような活動が必要である。

- ・論文のテーマ選択
- ・指導・助言を求める／受ける

この場面では、指導教員だけでなく、博士後期課程の大学院生や助手の方々からのアドバイスを受けながら、留学生が自分の研究活動を遂行し、それを後日報告するという重要なプロセスが含まれる。留学生が必要を認めた場合に自ら指導教員に連絡をとって相談の日時を決めることも、実際の相談の前に行うべき重要な行動である。

以上示したように、専門日本語コミュニケーションの場面では、明らかに、学習・研究活動上の同一または類似の目的を有するディスコース・コミュニティ（Swales 1990）が認められ、そこで使用される日本語はそれぞれ表現形式に適切に反映されるものと考えられる。

3-3 専門日本語教育に資する視点

ここでは、以上の報告をもとに、専門日本語教育に資する視点を大きく3つに分けて論じる。

3-3-1 専門日本語の文体・スタイルの認識

専門日本語は、特定の局面で繰り返し用いられるパターン化されたものであり、また、特に研究活動の観点からはあいまいさを極力排除しようとするものである。つまり、専門日本語が用いられる多くの場面において、目的も、想定される参加者やメンバーも明確であり、そこで同じ目的を有する関係者がパターン化された文体・スタイルの日本語を用いて活動しながら特定のコミュニティを構成していると言える。したがって、専門日本語教育のデザインを行う教員も学習者もそのことを予め十分に認識しておく必要がある。

3-3-2 専門日本語が示す範囲の言語学的レベル

専門日本語を扱う、あるいは論じる場合には、次のような複数のレベルが考慮される必要がある。

- ・単語・語彙のレベル
- ・文型のレベル
- ・文章・談話、文体のレベル
- ・言語生活のレベル

単語も、単語の集まりである語彙も、また文型も、各々特定の目的や場面が存在する言語生活において用いられている。また、それらは、文章・談話あるいは文体のレベルにおいても、パターン化等の特徴が見られるものと考えられる。専門日本語自体を研究対象とする、あるいは教育で扱う場合に、この視点は重要である。

3-3-3 学習者と教員に必要な視点

3点目は、専門日本語教育を成功させるために関係者が持つべき次の視点である。

- ・専門日本語コミュニケーションの場面と環境を知ろうとする姿勢
- ・学習者自らによる学習課題の認識
- ・学習課題達成のための環境整備

⇒人的・物的リソースの所在と活用方法の検討

「専門日本語コミュニケーションの場面と環境を知ろうとする姿勢」は、教員と学習者双方にとって重要な姿勢である。教員側も、特に自身の専門分野のものとは異なる学習者の専門日本語コミュニケーションの場面等を謙虚に知ろうとすることが必要であろう。また、ある程度の専門性を有する成人の学習者が、ニーズを明確に持つだけでなく、自分にとって必要な学習課題を、適宜周囲からの支援を受けながら十分に見極めることも重要である。最後に、そういった学習課題の達成のために紙媒体やインターネット上の関連教材等に加え、人的なネットワークも含めたあらゆるリソースの整備が求められると言える。

4 セミナー全体の意義

本セミナーでは、日本とタイの大学における日本語教育担当の教員が、各大学の教育の理念と実践を報告し、それらをふまえて、専門日本語教育の観点から全体討論を行った。また、発表者以外に日本あるいはタイの関係機関に所属する多くの出席者からも、各大学の個々の状況に応じた教育実践やそれをめぐる環境等に関する積極的な質疑応答が行われた。

セミナー全体の意義は、人的・物的リソースや環境が各々異なる教育現場の関係者が、改めて大学における日本語教育はどうあるべきかという共通のテーマのもと、入念に現状分析をしつつ意見交換を行い、将来に向けて、より有意義な日本語教育を行うための「専門日本語教育」の視座を共有できたことである。大阪大学とタイの大学では、学習環境等、種々の点で条件が異なることが非常に多い。大阪大学では第2言語環境の中、多様な国や地域から来日した留学生を対象に、各専門分野に配慮しつつ日本語教育を行っている。一方、タイの大学では、学習者は、母語環境の中で、教員から必要に応じて母語による指導を受けつつ、同じ母語話者のクラスメートとともに日本語学習を行っている。また、タイ人日本語学習者は、母国の大学で日本語を学習した後には、短期長期を問わず、日本への留学希望がある他、就職先として日系企業を選択した

いといった実利的な目的を持つビジネス志向の者も多い。このように、日本とタイの大学では、大学内外の言語環境、教室内の使用言語、大学で日本語を学ぶ目的等、異なる側面が多いと言える。大阪大学側にとっては、来日したタイ人留学生の母国で受けた日本語カリキュラム等の実際や学習の状況を、関係教員から直接知り得たことも大きな収穫の一つであった。

最後に、専門日本語教育という視座の提供によって、日本語教育の専門家が今後さらに求められる役割についても、ある程度共通の認識が得られたと言えるであろう。つまり、専門日本語教育を成功させるためには、言語学習のための環境整備が極めて重要であり、その環境整備も日本語教育の専門家が今後さらに重視する必要のあるものである。大阪大学を例にとれば、日本語教育の担当教員は、留学生の指導教員をはじめとする研究室メンバーといった人的リソースが留学生の日本語学習に十分に貢献できるよう、直接あるいは間接に、種々のコーディネーションを継続していくことも重要であると思われる。大学における専門日本語教育は、日本語教育関係者と学習者のみで完結するものでは決してなく、多くの関係者の高い関心と双方の緩やかな連携体制の維持も肝要であると結論できる。

本稿の1節と2節は三牧が、3節と4節は村岡が執筆した。

注

1. ちなみに、他の5件は、それぞれ、人間科学研究科、薬学研究科、理学/基礎工学研究科、基礎工学研究科、微生物病研究所が提供した。
2. 第2位：「第2言語として生活に必要」25.1%、第3位：「人間関係構築のため」「日本文化社会に関心」各14.5%。この結果は、同時に調査した

研究者の場合、第1位と第2位が逆転していたのと対照的であった。

3. 宮島（1981 p.6）は専門分野に特有な単語（専門語）と、専門分野における文法的特長や位相・文体的特徴も含める「専門言語」という考え方を紹介しており、示唆的である。
4. 調査協力が得られた7名の理系大学院留学生に対し、5ヶ月間にわたり、1人あたり合計4回のインタビュー調査を行った。

参考文献

- 大阪大学留学生センター（2003）『大阪大学における日本語教育カリキュラム改革に関する全学アンケート調査報告書』
- 大阪大学留学生センター（2006）『留学生日本語プログラム履修ガイド2006年度』
- 三牧陽子、北浜榮子、浜田麻里、山田泉（2002）「留学生の言語生活と日本語学習——留学生および受け入れ側に対するインタビュー調査から——」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第6号 pp. 79-91
- 三牧陽子（2006）『科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書 平成14年度～平成17年度 課題番号14580329 大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』
- 宮島達夫（1981）『国立国語研究所報告68 専門語の諸問題』秀英出版
- 村岡貴子（2003）「日本の理系大学院で学ぶ留学生の専門日本語コミュニケーション」『社会言語科学』社会言語科学会 第6巻第1号 pp. 99-111
- Swales, John. M. 1990 *Genre Analysis: English in Academic and research settings*, Cambridge University Press